

広東コンミュンについての一考察

重 森 宣 雄

目 次

はじめに

- 一、中共中央の十一月拡大会議
- 二、中共中央の広東暴動指令
- 三、中共広東省委員会による蜂起の準備
- 四、蜂起の決行
- 五、暴動失敗後の中共中央とコミンテルンの批判
おわりに

はじめに

一九二七年一二月一日、華南最大の都市広州で、中国共産党広東省委員会の指導のもとに、労働者と革命的兵士による武装蜂起が行なわれた。この蜂起は、世にいわゆる「広東コンミュン」として知られているが、一旦蜂起に

成功して、広州ソビエト政府を組織したのもつかの間、わずか三日にして優勢な反革命軍のために粉碎された。それは今日からすれば、当時の中共中央を支配していた左翼冒險主義路線がもたらした悲劇的事件であつたといえるが、しかしこの蜂起の結果、一時的にせよ広州市内の大半が労働者、兵士的手中に帰して、ソビエト政權が樹立され、中国におけるソビエト革命——土地革命——の開幕を告げる役割を果たした点において、広州蜂起は中国革命史上重要な一時期をなしている。

ところで、この「広東コンミュン」の詳細については、国民党政權による徹底した弾圧と、激烈な国共内戦下にあつたソビエト革命期の他の事例にもれず、資料不足も手伝つて、わが国では十分に解明されているとはいえない。しかし、最近ソビエトで発表された論文資料は、⁽¹⁾これまで不明だつた幾つかの点——たとえば、「間斷なき革命」の規定とコミンテルンの関係、党中央の暴動指令と広東省委員会の暴動宣言の内容、蜂起失敗直後の党中央の態度といった——を明らかにする上で、役立つところが多い。そこで、この小論では、筆者が利用できた限りの資料にもとづいて、これらの点の解明に重点をおいて論をすすめることにする。

- (1) Кантонская коммуна (к сорокалетию восстания в Гуанчжоу), 1967; Коминтерн и Восток, 1969. 特に前書には次のような論文資料が収録されており貴重である。ただ原文ではなく、ロシア語訳であるのは遺憾であるが、今のところやむをえない。А. Г. Афанасьев, Героическое восстание пролетариата Гуанчжоу 11-13 декабря 1927г.; Цюй Вэй-то (Страхов), Кантонское восстание и китайская революция (к первой годовщине Кантонского восстания): Дэн чжун-ся, Китайская коммунистическая партия в Кантонском восстании: Обращение коммунистической партии Китая к народу по поводу восстания рабочих, крестьян и солдат Гуандуна: Вторичное Обращение Коммунистической партии Китая к народу по поводу восстания в Гуанчжоу: Обращение Гуандунского провинциального комитета Коммунистической партии Китая к народу с призывом к восстанию.

一、中共中央の十一月拡大会議

広州蜂起のあった一九二七年後半の中国の情勢は、革命勢力にとって極めて不利な状態にあった。すなわち、蔣介石による四・一二反共クーデターおよび七月の武漢国民党政府の革命離反によって、一九二四年から続いた国共合作が終わり、革命の波は大きく後退していた。そして、この激変した情勢を挽回するために決行された、八・一南昌武装蜂起が失敗に帰したばかりか、その失敗直後の八・七会議——ここで中共中央は、陳独秀を廃して、瞿秋白を総書記とする新指導部を選ぶとともに、武装暴動と土地革命の方針を決定し、革命路線の転換をはかった——の決定にもとづく秋の收穫期を目ざした一連の蜂起——秋収蜂起も失敗に終わっていた。したがって、このような状況のもとでは、広州のような大都市を、長期にわたって革命派の手中におくことは不可能であった。しかもこの時、当時湖南省での秋収蜂起を指導し、自ら長沙攻撃に失敗して苦境にあった毛沢東は、今や組織的に退却しながら適当な場所に根拠地をうちたて、革命勢力を温存することが必要だという判断のもとに、すでに十月には井崗山への歴史的な進撃を開始していた。

ところが中共中央は、一九二七年一月九日、秋収蜂起失敗後の情勢に対処するために臨時政治局拡大会議を開き、⁽²⁾「中国の現状と党の任務に関する決議」を採択したが、この決議で、中国革命の性質を「間断なき革命」であると規定するとともに、中国における革命情勢は不断に高揚するとの認識のもとに、武装暴動による都市の奪取に重点をおいていた。このことは同決議のなかで、「都市の労働者を軽視し、単に農民に呼応する勢力とみなすことは非常に間違っている。党の責任は労働者の日常闘争を指導し、広範な大衆の革命的な高まりを發展させ、暴動を組織し、彼

らが武装暴動を起こすように指導することにより、暴動を起こした都市が自然発生的な農民暴動の中心および指導者となるように努めることである。都市の労働者の暴動は、革命の勝利が巨大な暴動で強固になり、発展するための先決条件である⁽³⁾と述べていることから明らかであった。またそれと同時に、同拡大会議はその決議で、「一切の権力を労働兵代表者会議へ」というソビエト政權樹立のスローガンを正式に提起するとともに、八・七会議では除外されていた小地主の土地をも含む「一切の地主の土地没収」を決定し、徹底した土地革命の方針をうちだしたのであった。

中共中央がこの急進的な路線を決定した背景は何だったか。これに関連して若干の事実にふれておきたい。それは、広州蜂起が失敗してから約八カ月後の、一九二八年七月の中共第六回大会で明らかにされたことであるが、その大会速記録によると、「一九二七年八月に開かれた会議後間もなく、中央委員会の多数の委員は、中国革命がすでに新たな段階にあるという意見にしたがった⁽⁴⁾」としている。しかも、こうした見解は中共中央内部にみられただけでなく、同速記録に載っている湖南省党組織代表の発言によれば、秋收蜂起の時に、毛沢東も、「われわれは今や直接の労働革命、すなわち、社会主義革命にはいつている⁽⁵⁾」という考えに立っていたとしている。この毛沢東に関する指摘の当否については、これまで明らかにされていなかった事柄であり、今後の検討にまたなければならぬが、これらの指摘からいって、当時の中共内部には、情勢の激変に伴って革命の性質が何らか変化した、とする見方がかなり有力に存在していたとみななければならない。そして、ここで中共指導部の革命に対する認識が変化したことが、その後の過程でのコミンテルンによる影響とあいまって、十一月決議で問題の「間断なき革命」の規定を採択する契機になったといえる。

この点について、石川忠雄氏は、「一九二八年二月のコミンテルン執行委員会第九回プレナム決議は、十一月拡大会議が「間断なき革命」の概念を提起したことについて、それが誤謬であることを指摘するとともに、当時のコミンテルン執行委員会の代表者の立場でもあったことを明らかにしている。この場合、コミンテルン執行委員会の代表者とは誰を指すのか不明であるが、少くともコミンテルン執行委員会関係者のなかに、十一月拡大会議当時、革命情勢の不断の昂揚を主張する見解が存在していたことは否定しえないところであろう」と述べているが、最近ソビエトのグリゴリエフはこの点について、「この規定（「間断なき革命」Ⅱ引用者註）は、コミンテルン執行委員会の意見に反して、中国共産党第五回大会のときに中国にやってきた、コミンテルン執行委員会代表ロミナーゼの影響を受けて採択された⁽⁷⁾」ことを明らかにしている。したがって、このことからいって、コミンテルン代表として八・七会議に参加し、これを指導したロミナーゼが、十一月拡大会議の決議決定の上でも大きな役割を果たしたことが分かるのである。この点で、ロミナーゼは中共中央の左翼的路線の形成に手を貸したといえる。

かくして、ここに中共中央の十一月拡大会議は、シュウォルツも指摘しているように、広東コンミュンに対して「理論的な基礎⁽⁸⁾」を与えたのである。

(2) 中共中央の臨時政治局拡大会議は一般に十一月九日に開かれたとされているが、中国の胡華はその開催日を十一月八日としている（胡華主編「中国革命史講義」八一九六二年修訂本Ⅴ二二二頁）。筆者はここでは確かめようがないので、従来の説にしたがっておく。なおここでふれておきたいのは、衛藤藩吉氏がその「広東コンミュン史稿」（「東アジア政治史研究」所収）で、「中共中央臨時政治局拡大会議は、一般には十一月九日に開かれたといわれているが、橋樑のみは会議の開催日には言及せず、決議文が一月二八日付になっている旨明記している。いずれを是とすべきかわからない」（同書三〇頁）とされていることである。この衛藤氏の指摘は、「十一月二十八日附で出された中央臨時政治局拡大会議の二つの文書」（橋樑「中国革命史

論」二五七頁) という橋氏の所説にもとづいたものであるが、この点については波多野乾一編「中国共産党史」第一巻所収の「大塚令三氏の文献考」に、「布爾塞維克第六期中国共産党中央臨時政治局擴大會議特刊一九二七年十一月二十八日出版」(同書六六九頁)と明記されている。したがってこのことからいって、衛藤氏がここで問題にされている旨の目付が、決議文の目付を指すのではなくて、十一月會議の諸決議を収録した中共機關誌「布爾塞維克第六期」の発行日を指していることは明らかではなからうか。

(3) 胡華主編、前掲書二二二頁。鈴木言一「中国解放闘争史」二五八—二五九頁。ここでは前書から訳出した。

(4) A. M. Григорьев, Коминтерн и революционное движение в Китае под лозунгом советов (1928-1930), —〈Коминтерн и Восток〉, 1969, стр. 320.

(5) Григорьев, там же, стр. 320. ここでグリゴリエフが大会速記録から引用して、毛沢東についてふれている箇所の全文は次のようになっている。すなわち、『このような見解は一連の地方党组织の活動にも、特に秋收農民蜂起のときに湖南で現われた。湖南省の党组织の代表は大会で、「湖南省には偏向、すなわち、同志毛沢東の特別な理論が存在している。彼は完全な思想体系をもっている…。彼は、われわれは今や直接の労働革命、すなわち、社会主義革命にはいつている…といていた。革命はもはや社会主義革命になったという同志毛沢東の説は、広範な大衆の間で広くゆきわたっている、と私はいわなければならぬ」(〈Стенографический отчет VI съезда КПК〉, М., 1930, кн. 2, стр. 80-81) と述べた』とつづいて(Григорьев, там же, стр. 320)。「コミンテルン創立五〇周年にあたって、こうした事実が明るみに出された背景には中ソ間の厳しい現実が横たわっている。したがって本文でもふれたように、その当否については十分検討の余地があるし、また毛沢東について論じるのが本論の主題ではないので、これについては別の機会にゆずりたいが、ただここでは次のことを指摘しておきたい。それというのは、すでによく知られているように、毛沢東は、湖南での秋收蜂起の指導にあたって、「(1)省党部の国民党からの完全な分離、(2)労働革命軍の組織、(3)大地主および中小地主の財産の没収、(4)国民党から独立した共産党政権の湖南での樹立、(5)ソビエトの組織」(Edgar Snow, Red Star Over China, 1937, p. 149) という、時の党中央およびコミンテルンと意見を異にする独自の、むしろ当時としては急進的な指導方針をかかげていたことである。このことからいって、この大会における湖南の党组织代表の発言は、全く根拠のない単なる中傷にもとづくものとはいえないのではなからうか。筆者には、最近の毛沢東はとみに過去へ回帰しつつあるように思われてならない。

- (6) 石川忠雄「中国共産党史研究」一四二—一四三頁。
- (7) Луповцев, Там же, стр. 314.
- (8) Benjamin I. Schwartz. Chinese Communism and the Rise of Mao, 1951, p. 105.

二、中共中央の広東暴動指令

蜂起を前にした広州をめぐる情勢は非常に複雑であつた。すなわち、前述の上海での四・一二反共クーデターに次いで、四月一五日、広東でも李済深による反共クーデターが行なわれ、革命的組織は一斉に弾圧を受けた。この結果、広州の労働者組織も機械工組合を中心とする黄色組合と、労働者代表者会議に結集する革命的な組合に割れたが、革命的労働者は中共広東省委員会の指導のもとに、その後も四月二三日の政治ストを契機に大衆的なデモや集会を組織して闘争を続けた。この労働者の闘争は、十月中旬に汪精衛系の広東派軍閥の張発奎が広州に帰還したのを機会に、それ以後高まりをさえみせ始めた。というのは、張発奎軍には第四軍参謀長兼教導団長の葉劍英をはじめとする、中共の秘密党組織があり、特に教導団を中心に党の影響力が強かったことや、張発奎自身、広西派に對抗する必要上共産党の協力を欲し、当時まだ公然と反共的態度をとっていなかったからであつた。⁽⁹⁾ このため十月一四日には、江門と汕頭⁽¹⁰⁾の海員労働者の経済スト支援のため、広州で数万の海員労働者によるデモが組織され、これを契機に「国民党打倒」のスローガンが提起された。

一方、張発奎軍が広東に帰還したことにより、広西派(李済深・黄紹雄)、広東派(張発奎・黄琪翔)両軍閥間で地盤の争奪をめぐる暗闘が始まったが、この両派の対立は次第に表面化して激しくなり、十一月一七日には、ついに

張發奎軍によるクーデターとなって現われた。このため、広東、広西両派間の関係はまさに一触即発の状態となった。

また農村でも、秋にはいつて海南島、海豊、陸豊などの地域で、農民蜂起が起こった。とりわけ海陸豊では、一九二七年四月末から三回にわたって武装暴動が計画され、そのうち二度までは失敗に終わったが、十月末に至り南昌蜂起後南下した賀竜・葉挺軍の一部残存部隊と合して勢力を増し、やがて彭湃の指導のもとに蜂起は成功したのであった。かくて、十一月三日と一八日に、陸豊と海豊に相次いでソビエト政権が樹立されるにいたった⁽⁴⁾。

こうした広州をめぐる事態を前にして、当時上海にあった党中央は、その地の有する革命的伝統からして、近いうちに広州で暴動を起こすことが可能だと判断していた。そこで中共中央は、十一月一七日の全体会議で広州暴動についての決定を採択するとともに、翌一八日、中共広東省委員会に対して暴動準備のための指令を与えたのであった。

ここで中共中央が党広東省委員会に与えた指令の内容については、これまでハロルド・アイザックスにより暴動の目的を述べた部分、つまり、「広東の労働者と農民にとって、危機的な状態からのがれることのできる唯一の出口は、打ち続く軍閥間と国民党内の不和を利用して、都市および農村で労働者と農民の暴動を起こすとともに、兵士に對し、暴動鎮圧令を実行することにしたがわないう拒否するように働きかけることにより、これらの部分的な暴動を、広東省全体を手に入れ、労働者・農民代表者政権の樹立を目的とする総暴動に急速に結びつけることである⁽⁵⁾」という箇所が紹介されていた。しかし、鄧中夏の「広東暴動における中国共産党」によると、中共中央は、それと同時にこの指令で、広東省委員会に対して二項目からなる具体的な提案をしている。すなわち、中共中央はここで、

- (1) 広東省委員会は省の全ての労働者と農民に對して、互いに戦っている広東派と広西派軍閥に反對して決起し、労働兵貧民代表者ソビエト政権をうちたてるように呼びかける宣言を出すこと、
- (2) 広東の労働者は革命的な労働組合

活動の指導にイニシアチブを発揮し、権力を完全に奪取するため市内で政治的なゼネストを行なうこと、(3) 海陸豊の労農革命軍は、義勇兵の数を最大限にふやすように農民大衆に働きかけること、惠州と広東の占領計画を立てる場合、陳濟棠の軍隊と黄琪翔の軍隊が東江一帯で戦闘するか、または東江地域で連合するかを考慮すること、労働者・農民軍は前進しながら、農民に対し、地主と劣紳を一掃して土地を分配するようにしむけ、農業革命を深めること、(4) 張発奎と黄琪翔が共に戦い、ゼネストが宣言された場合、広東の三つの鉄道労働者に対し、機械工組合の反動的な指導者を一掃して鉄道の管理を自己の手中に収めるように呼びかけること、(5) 広東省の各地域および広東周辺で農民運動を起こすとき、その力を広東に集中させることに特に注意を向け、敵の水陸交通路を絶つためにあらゆる努力を払うこと、それと同時に、農村で革命的な暴動を起こすこと、(6) 江西省の信豊に退却した労働者・農民軍第一師団は、農民と合して五華および紫金地域で農民暴動を起こすため、老隆、興寧および五華方面へ直ちに赴くこと、⁽⁴⁾ (7) 軍閥の軍隊内での活動指令にしたがい、広東省委員会は、兵士たちに決起して農村へ行き、労働者・農民軍に加わるように説得するため、どのようにして軍隊の隊伍のなかにはいりこんで、兵士たちの間に動揺を起こさせればよいかを、全ての軍の同志に教えること、(8) 広東における現在の事態は労働者と農民の成功を助けている。広東省委員会全体がこの活動のために動員されなければならないし、どのような決定を採択するにしても、委員会は本全体会議の決議とそれを一致させ、全力をあげてこの決議を実行するために努力すること、などを指示していた。⁽⁴⁾

この指令から明らかなように、中共中央の狙いは廣州暴動と広東各地の農民暴動を結びつけ、まず廣州にソビエト政権を樹立したのち、蜂起した農民と連合して広東一帯の革命根拠地化をはかろうとするにであったといえる。したがってこの点において、「当時の中央としては広東軍の武装暴動そのものよりも、湖南・広東各地の労農武装闘争を集中

的に指導し、この省境地域に根拠地を建設することを想定して、その一環として広東市の武装暴動を組織すべきであったであろう⁽¹⁴⁾とする中西功氏の指摘は、必ずしも当を得たものといえないのではなからうか。少なくとも中共中央の指令から判断する限り、中共中央の意図していたのが、「広東軍の武装暴動そのもの」だけでなかったことは明らかである。しかしその後の事実が示すように、中共のそうした初期の計画は実現せず、結局は広州暴動だけの孤立した蜂起に終わったのであった。このことはこの指令が、広東をめぐる当時の反革命勢力内部の矛盾を過大視するとともに、「広東における現在の事態は労働者と農民の成功を助けている」とする、実際には中共中央の早計な情勢判断にもとづいたものであったからだといわなければならない。そして、党中央が指令の早急な実行を地元委員会に義務づけたことが、悲劇的な結果を生む原因ともなった。

(9) この点について鄧中夏は、「張発奎は共産党と数回関係をもとうとしたが、広東省委員会はちゅうちよすることなく拒否し、大衆に事態を説明した。そこで、いわゆる左翼国民党政府は公然と白色テロの政策に移った」と述べている (Дэн Чжун-ся, Китайская коммунистическая партия в Кантонском восстании—〈Кантонская коммуна〉, 1957, стр. 100)。なお、広東省委員会の暴動宣言でも、張発奎が共産党と交渉をもとうとしたこの事実にふれている (後出〔註16〕参照)。

(10) 海陸豊ソビエトの詳細については、衛藤藩吉「海陸豊ソビエト史」(『東アジア政治史研究』所収)を参照のこと。ここでソビエト政権樹立の日付も同書によった。

(11) Дэн Чжун-ся, там же, стр. 94. 同じく鄧中夏によれば、八・七会議で党中央臨時政治局の「政治局員に選ばれた」蘇兆徴が、「直接広州暴動を指導しなかったけれども、広州暴動の総計画およびこの問題に関する中央委員会の指令の討議に最も積極的に参加した」としている (Дэн Чжун-ся, Биография товарища Су Чжао-чжэна, там же, стр. 126-127)。この指摘からいって、蘇兆徴は政治局員として広州暴動を討議したこの時の党中央の全体会議に参加したとも考えられる。なお中共中央がここで暴動を計画するにあたって、コミンテルンによる指示がその有力な原因をなしたという説があるが (Robert C. North, Moscow and Chinese Communists, 1953, P. 117)、筆者からすれば当の原因は当時の中共中央の極左冒險主義的な指導路線

そのものにあつたと考えたい。というのは、不利な情勢のもとにありながら革命の高揚を認め、都市を中心に総暴動を指向していた中共中央の当時の立場からするならば、外部からの指令をまたずとも、蜂起を前に広東に生じた事態を絶好の機会とみなし、遅かれ早かれ暴動に訴えようとするのは当然の帰結だからである。ちなみに広東省委員会自体、一月一七日の時点において、「反動陣営内部の分裂は極度の緊張に達し、武装的な手段で権力を自己の手中に獲得しようとする人民大衆の決意は完全に熟した」と判断していた (Т. Н. Акарова. Рабочий класс и Кантонская коммуна, там же, стр. 53)。しかし少なくともこの暴動を計画し実行するにあたって、当時のコンテルン代表ハインツ・ノイマンが重要な役割を果たしたことは否定できない。このことは、蜂起失敗後の翌一九二八年二月の第九回ブレナム決議で、コンテルン自ら蜂起「指導上の誤りに対する責任の一端は、コンテルンに対して政治的に責任を負っている直接の指導者 (同志 N ら) にある」 (там же стр. 212) と述べていることから推測できる。

(12) Дэн Чжун-ся, Китайская коммунистическая партия в Кантонском восстании, там же, стр. 95 : Harold R. Isaacs, The Tragedy of the Chinese Revolution, 1938. 邦訳本鹿島宗二郎訳「中国革命の悲劇」四七三—四七四頁。ただし、アイザックスの引用では一部省略されている。

(13) А. Смедлей, 阿部知二訳「偉大なる道」によると、当時朱徳軍に広東省委員会から蜂起支援を求める招請状が送られ、これにもとづいて、朱徳軍が行動を開始したことが明らかにされている (同書上巻二三三頁)。なおここでの地名は、ロシア語の転記では Синьфан, Ухуа, Цзысин, Людун, Синьнин となっているが、若干疑問な点もあるので、種々考慮の上、筆者の判断にしたがった。しかし、筆者の不勉強のために誤りをおかしている点があると思われるので、地名に詳しい方の御教示をえたい。

(14) Дэн Чжун-ся, там же, стр. 95-97.

(15) 中西功「武漢に於ける革命と反革命」一六六頁。

三、中共広東省委員会による蜂起の準備

中共広東省委員会は、一月一七日のクーデター以後、新たに「ソビエト政権のために」のスローガンをかかげて

大衆の闘争を指導したが、十一月二六日党中央から指令を受け取るや、直ちに会議を開いてその決定を支持するとともに、暴動呼びかけの宣言とスローガンを出すことを決めた。またそれと同時に、暴動の準備計画として、(1)武装暴動の総政綱の作成、(2)武装暴動のための軍事的準備、(3)蜂起の機関としての広州ソビエトの組織、(4)赤色労働組合を利用する労働者の動員、(5)兵士の間での活動の強化、(6)農民との接触と農民の間での暴動の準備にとりかかることにした。そして十一月二八日、広東省委員会は歴史的な暴動宣言を行ない、広東の労働者、農民、兵士に対して、「問題は今や次のように立てられる。すなわち、李済深に広州で白色テロを樹立させるか、ソビエト政権（労働兵代表者会議）を打ち立てるかにある。……広州のために戦うには、揺ぎない決意と勇気が必要である。全中国および全世界の注意は諸君たちに向けられている。戦闘の決定的な時がやがて訪れようとしている。……労働者、農民、兵士諸君、広州を防衛せよ！李済深と黄紹雄に反対せよ！権力を奪取せよ！広州ソビエト政権のために戦う準備をせよ！軍閥戦争を労働者、農民、兵士の勝利的な革命戦争に変えよ！人民大衆の革命のために！ソビエト政権のため！帝国主義者、軍閥、資本家を打倒せよ！」と呼びかけた。⁽⁶⁾

党広東省委員会はこの暴動宣言を出す一方、軍事上の準備として、広東省委員会書記張太雷を長とする革命軍事委員会を組織するとともに、二千名の労働者からなる赤衛隊と二個中隊の決死隊を編成し、さらに蜂起のときに必要な輸送手段や武器の準備にとりかかった。

こうしたなかで、広州の情勢は一二月にはいつて一層複雑となった。というのは、広東、広西両派軍閥間の対立が激化し、ついに相互に軍事行動を開始したからであり、張発奎軍もその主力は西江・北江一帯に向かって進撃したのであった。このため、広州に残ったのは教導団など一部の部隊だけとなり、その守りは極めて手薄となった。しかも

内戦状態の出現によって経済的不安は高まり、軍閥支配に対する労働者の反抗が増大しただけでなく、一般市民も不満を示し始めた。そこで二月七日、約八〇名の代表が参加して、秘密裡に労農兵代表者会議が開かれた。この会議で中共はソビエトの執行委員一六名を選び（労働者から一〇名、兵士から三名、市近郊農民組合から三名——実際にソビエトの活動に参加したのは一名だけ——、ほかに共産党代表も委員会活動に参加した）、広州ソビエトの執行委員会を組織するとともに、暴動計画と準備活動について最終的な検討を行ない、一二月一二日に蜂起を決行することを決定した。⁽¹⁷⁾これに伴って、執行委員会は直ちに大衆動員に着手した。

党はまず省港ストライキに参加した労働者のなかで活動を展開したほか、広州市内に配備されていた軍隊に対する働きかけを強めた。また、市近郊農民に対しても働きかけがなされ、アフアナシェフによると、「芳庄（広州から数十キロ離れた）の組織との接触が保たれた。広州・九竜鉄道沿線の東莞および宝安地区の農民の間で騒擾が起ったが、その指導者とも連絡がとられた。近郊地域では、農民の積極分子のために非合法の講習会をつくることに成功した⁽¹⁸⁾」とされている。

しかし、こうした大衆動員は、実際には強固な反動的支配のもとで不十分に終わったのであった。張發奎軍の教導団のように、一二〇〇名（一説では一三〇〇名）からなる士官候補生のうち二〇〇名が共産党員で党の影響が強く、一部の高級将校を除いてその大半がソビエト革命を支持した例もあるが、それはむしろ例外であった。肝心の労働者にしても、それまで広東の労働運動で指導的な役割を果たしていた省港ストライキ委員会が、暴動の一月前に軍閥政府によって解散させられ、その管理下にあった労働者の公共食堂と宿舍も閉鎖されたことによって、当時まだ広州に留まっていた約三万のスト参加者のうち、五〇〇名の糾察隊員だけが非合法の赤衛隊組織に残り、他の多くは離散す

るという状態だった。このように広東の革命的労働者の主要な組織的中心が粉碎され、分散していたことが、大衆の動員活動を妨げる大きな原因となり、蜂起前にゼネストを執行する計画も中止せざるをえなかった。⁽¹⁹⁾農民に対する働きかけにしても結局は広州近郊だけに限られたが、そのどこにも活動の中核をなす党の細胞はなく、予期した成果を上げることはできなかった。また海陸豊にはソビエト政権が樹立されていても、広州とは余りにも離れており、その支援を期待することは無理だった。

- (16) Обращение Гуандунского провинциального комитета коммунистической партии Китая к народу с призывом к восстанию, там же, стр. 205-206. なおこの暴動宣言で中共広東省委員会は、張發奎が広西派に対抗上党に協力を求めた事実を明らかにするとともに、その交渉条件を提起している点でわれわれの興味を引く。すなわち、次のように述べている。「張發奎は労働者迫害政策とテロ政策を行なっているが、予定の目的を達するのに十分な力がないので、彼は結局われわれに交渉の提案をせざるをえなかった。われわれは次の諸条件を提起する。すなわち、(1)全ての革命的政治犯を即時釈放すること、(2)いわゆる労働組合改組委員会の占拠している革命的労働組合の建物を即時に明け渡すこと、(3)広東および香港の労働者にストライキの権利を与えること、(4)労働者階級に言論・出版・集会・示威運動および罷業の自由、並びに自己の階級的な組織をもつ権利を与えること、また、共産党、革命的労働組合および広州の労働者代表者会議を合法的な組織として公認すること、(5)労働者を迫害した全ての者を逮捕し処罰すること、(6)広州の労働者を即時武装させること、かつ武装した労働者部隊は労働者代表者会議の管理下になければならない。これらの六項目が受け入れられたならば、広州における労働革命の勝利を保障し、李済深と黄紹雄の部隊に反撃を加えるため、われわれは交渉することに同意する」(там же, стр. 204-205)
- (17) 李藍天「廣州起義記実」(史学双周刊社編「第二次国内革命戦争時期史事論叢」所収)二八頁・A. Г. Афанасьев, Герои-чешское восстание пролетариата Гуанчжоу 11-13 декабря 1927 г., там же, стр. 12.
- (18) Афанасьев, там же, стр. 13.

- (19) 鄧中夏によれば、「蜂起の一週間前に、広東省委員会は党細胞の書記会議を二回開いた。初めての会議ではゼネストの問題が検討され、出席した同志の大多数はゼネストを実行することが可能なことに賛成した。しかし会議後間もなく、多くの細胞書記

は相次いで申請書を送り、そのなかでゼネストが困難なことを注意した」としている (Дэн Чжун-ся, там же, стр. 102)。

四、蜂起の決行

前述のように、暴動は前以って二月一日に決行されることになっていたが、その後の事態の急変で、にわかに二月一日午前三時半に決行することに変更された。⁽²⁰⁾ というのは、二月九日、当時上海にいた汪精衛から広州で暴動が準備されているとの知らせを受けて、張發奎は直ちに前線にあった黄琪翔に教導団の武装を解除するため、軍を率いて広州に戻るよう命令を下した。そして一日、黄琪翔が軍隊とともに市内に到着したからであった。

かくして、広州暴動は予定通り二月一日に開始されたが、暴動決行時における革命派と敵との勢力関係は次のようになっていた。すなわち、アイザックスが引用している葉挺および陳紹禹の推定によれば、「蜂起の実際の参加者は……四二〇〇名」、その有した武器は、「回転拳銃、自動拳銃が多くて三〇挺、手榴弾が多くて二〇〇個、労働者の手にあったライフル銃が多くて五〇挺、兵士の手にあったライフル銃が多くて一六〇〇挺」であった。これに対して、広東軍閥政権側は、「市内に装備のよい兵士五〇〇〇名、それに加えて警察官一〇〇〇名、機械工組合の武装ギャング隊一〇〇〇名」から成り、その武器も、「四〇〇〇挺以上のライフル銃、多数の機関銃、三五門の迫撃砲と大砲」を有した。しかもその上、「数隻の中国と外国の砲艦が江上に碇泊していたし、市の郊外にはほぼ完全な四個連隊が駐屯していた。またわずか二、三日の行程には、張發奎および李濟深の総数約五万の連合軍がいた⁽²¹⁾」のであった。これらの数字からいって、軍事的には明らかに革命派に不利だった。問題は労働者を始めとする大衆の支持如何にかかっていた。

こうした状況のもとでまず教導団が行動を開始した。蜂起開始時刻の二〇分前に張太雷がその兵營に姿を現わし、將兵を前にして蜂起呼びかけの演説を行なったのに対して、將兵は革命に忠誠を誓い、その場で反動的な將校一五名を射殺して決起した。九個中隊から成る教導団は、二個中隊で四標營を攻撃したのをはじめ、手分けして公安局、憲兵司令部、觀音山、広九停車場などを攻撃した。一方労働者赤衛隊も七個縦隊に分かれ、同時に公安局、警察署、保安隊などを攻撃した。そして、蜂起部隊は約二、三時間の間に、防御の堅固だった張発奎第四軍本部など二、三の拠点を除いて、觀音山、省長公署、公安局、軍械処、憲兵司令部、財政庁、電報局、郵便局および市内の各機關を占領するとともに、砲三〇門、小銃八〇〇挺以上を捕獲し、二〇〇〇名以上の政治犯を釈放した。

このようにして、市内の大半が革命派の手中に帰したことにより、同一日公安局において正式にソビエト政權が樹立され、主席蘇兆徴（當時彼は海豊へ行っていてこれなかったので張太雷が代理をした）、内務委員兼外務委員黃平、反革命肅清委員楊殷、労働委員周文雍、土地委員彭湃、司法委員陳郁、經濟委員何来、陸海軍委員張太雷、秘書長惲代英、紅軍總司令葉挺、參謀長徐光英から成る人民委員會、すなわち、広州ソビエト政府を組織した。ソビエト政府は直ちに活動を始め、中国の労働者、農民、兵士および全世界のプロレタリアートに対する宣言を採択するとともに、次のような基本政綱を発表した。すなわち、

「勤労人民全体に関するものとしては、(1)全ての權力を労働兵代表者會議へ、(2)労働者、農民の武装化、(3)軍閥の武装解除、(4)共産党の活動の完全な自由、国民党を法律の保護外におくこと、(5)政治犯の即時釈放、(6)全ての労働者に集会・結社・言論および出版の自由、(7)資本家の邸宅を没収し労働者の住宅にすること、(8)大資本家の財産没収、(9)労働者に対する全ての税金、全ての借金・利子の取り消しと、質屋を没収し質物の労働者への返還、労働者に関する

るものとしては、(1)八時間労働制の実施、(2)家内工業労働者のための労働時間の調節、(3)全ての労働者の賃金増額、(4)全ての失業者に最終就労場所での賃金額だけ国家から補助金の支給、(5)労働者の生産管理、(6)国家による賃金の保障、(7)全ての大工業企業、運輸機関および銀行の国有化、(8)全国総工会を中国のプロレタリアートの唯一の指導的な組織と認めること、(9)全てのファシスト的な労働組合組織の解散、(10)ストライキ委員会の即時回復、省港ストライキ参加労働者の権利回復、農民に関するものとしては、(1)全ての土地を国有化し、それを農民へ、(2)地主、土豪劣紳の一掃、(3)全ての土地契約・小作契約・手形の消滅、(4)田畑の境界標識の一掃、(5)全ての村および地区にソビエト政権を組織すること、兵士に関するものとしては、(1)国有化された土地の一部の兵士と失業者への分配、(2)軍隊の各部隊内に兵士委員会の組織化、(3)労農赤軍の組織化、(4)兵士の生活状態の改善、(5)兵士の給料の月二〇銀元への増額⁽²⁴⁾。

この基本政綱は、翌一二日の正午から西瓜園で開かれた労農兵代表者会議で、人民委員会委員の人選とともに承認された。

アフアナシエフによれば、そのほか、広州ソビエト政府は次のような活動をしていた。すなわちソビエト政府は、広東および全中国の人民に対して、特別電報で革命的な海陸豊を支持することを通告し、海陸豊ソビエト政権の顔触れを承認するとともに、全ての農民に対して、海陸豊の例にならって武装蜂起し、ソビエト政権と労農革命軍を組織するように呼びかけた。またソビエト政府は法令で国民党を法律の保護外におき、広州におけるその全組織の解散と財産の没収を決定した。そして、全ての国民党指導者を逮捕するようにとの指令を勤労者らに与えるとともに、国民党政府の要員には欠席裁判で死刑を宣告した。また、赤衛隊兵士、労働者、国民党軍兵士および釈放された政治犯で志願兵制の赤軍を組織する法令を公布したのであった⁽²⁵⁾。しかしこうしたソビエト政府の活動にもかかわらず、実際

にはその政策のほとんどは実行されなかった。というのは、情勢が革命派に有利だったのは、奇襲が効をそうした蜂起初日だけで、翌一二日には早くも次第に革命派に不利になったからであった。

この情勢の悪化をもたらした重要な原因は、強大な敵を前にして、肝心の大衆の支持を期待通り得られなかったことにあった。このことは鄧中夏が、「二万人以上の労働者が暴動に積極的に参加した」としながら、「確かにこのような数の参加者では暴動が勝利を収めるのに十分ではなかった」し、「広東省委員会と労働者代表者会議の努力にもかかわらず、広東の労働者の一部分しか暴動に積極的に参加しなかったので、暴動の社会的基礎は不十分だった」と述べていることから明らかであった。こうした蜂起の際における大衆の状況については葉挺も、「大衆は蜂起に参加しなかった。全ての店は閉じられ、店員たちはわれわれを助けようとはしなかった。……反動派はなおも広東―漢口鐵道を使うことができた。……電力会社の労働者が電灯を消したので、われわれは暗闇のなかで働かなければならなかった。広東と香港の労働者および海員は、イギリス帝国主義の圧迫を受けて戦闘に参加しようとはしなかった。……河川の船員は恥ずかしいことに反革命派に奉仕し、その渡河を助けたが、われわれは若干の乗船地点を知ることさえもできなかった。香港および広東―漢口鐵道の鐵道労働者は敵の電報を送信し、その兵士を輸送した。農民は鐵道線路を破壊することによってわれわれを助けなかったし、また敵が広東を攻撃できないようにしようとはしなかった」と述べている。これらの指摘からいって、一般的には大衆は蜂起に対して余り協力的ではなかったといえる。もちろんこれには、準備活動が不十分だったことや、蜂起の決行が急に早まり、その指示が大衆に周知徹底しなかったことも原因したと考えられるが、いずれにしても、蜂起は強大な敵を前にして盛り上がりを見せなかった。しかも問題はこうした大衆の態度だけにあつたのではなく、革命派自身の内部にも敵と戦う上で重大な弱点をかかえていた。この

点、葉挺の指摘するところによれば、蜂起部隊には「軍事的専門家が足りず、戦闘を組織的なものにするのにあてて下士官は全くいなかった。……誰も捕獲した二〇門の砲を使用できなかった。極く少数の者だけが二〇挺以上の捕獲した機関銃を使うことができた。教導団と赤衛隊部隊は市街戦の戦術を知らず、バリケードを設けることをしなかった。労働組合の責任ある同志たちには、防御設備をつくるため、三〇〇名の労働者を組織するようとの指令が与えられていたが、この活動は少しも進捗しなかった……。労働者の軍事的知識は著しく不足しており、大多数は銃を射撃することができなかった」という状態だった。その上、このように指摘している紅軍総司令の葉挺自身にしても、蜂起の始まる六時間前に広州に着いたばかりで、その情勢をよく知らなかったし、市街戦の経験に乏しかった。

このようなわけで蜂起部隊は兵力の補充も十分できず、戦闘の進展につれて戦力が急速に低下したのに反して、反革命軍は暴動鎮圧という点で一致協力した広東・広西両派軍閥によってたえず増強された。このため、情勢は一二日にはいつて次第に革命派に不利になっていったが、同日午後、政治的にも軍事的にも事実上広東コンミュンの指導者であった張太雷を失ってから、情勢は革命派にとって一層悪くなり、同日夜には敵軍の包囲下に落ち入った。かくて一二日夜半から一三日未明にかけて退去命令が出された。しかし赤衛隊は軍事的戦術にたけていなかったために、組織的に退却することできずにその多くは取り残された。そして、新たに珠江を渡河して総数約五万に達した敵の包囲攻撃を受け、わずかに千人余が包囲網を脱出したのを除いて、一二日午後遂に全員壮烈な最後をとげ、広東コンミュンはここに三日にして崩壊した。

(20) この蜂起の時期選定について、鄧中夏は、「暴動の時期選定の正しさの問題がわが党で大論争を引き起こしている。暴動の時期の選択がまずかったと考える観点が存在する」(Дэн Чжунся, там же, стр. 106) と指摘し、蜂起の時期選定をめぐって

中共党内で問題になったことを明らかにしている。なおこれについては衛藤氏も、『霍秋白は黨員中にこの暴動を「早すぎた行動」と見るいわゆる日和見主義者がいたことを婉曲に指摘している』（衛藤藩吉、前掲書三九頁）とされている。

(21) Isaacs, op. cit., pp. 287-288.

(22) 広州ソビエト政權がいつ正式に成立したかについては、従来から種々の説があり、いまだに定説はない（石川忠雄、前掲書一三二頁参照）。この点についてアフアナシエフは、二月一日午前六時に労働兵代表者からなる広州ソビエトが公安局に設けられ、同日午後五―六時に人民委員会、つまり広州ソビエト政府の設立が宣言されたとし、ソビエト設置の時期とソビエト政府設立の時期とを区別して推測している（Афанасьев, там же, стр. 17-18）。

(23) Цюй Цю-бо, Памяти Чжан Тай-лэя, там же, стр. 131. なお蘇兆徴はこのとき農民軍編成のために出かけていたという（衛藤藩吉、前掲書四三頁参照）。

(24) Афанасьев, там же, стр. 19-20.

(25) Там же, стр. 20-21.

(26) Дэн Чжун-ся, там же, стр. 102-103. なおアフアナシエフは蜂起の参加者を約二万七千名（労働者二万名、兵士二千名、農民二千名、被釈放政治犯八百名、黨員・共産青年同盟員二千名）としている（Афанасьев, там же, стр. 28）。

(27) Isaacs, op. cit., pp. 287-288.

(28) Афанасьев, там же, стр. 27-28.

五、暴動失敗後の中共中央とコミンテルンの批判

ところで、中共中央は広州暴動の報に接して、二月一日——実際にはすでに失敗したあとであったが、当時上海にあって事態の真相を的確につかめなかったことや、何よりもすぐには広州ソビエトの壊滅を信じえなかったことなどのためか——、人民に対する呼びかけを行ない、そのなかで広州暴動の成功、海陸豊での勝利を、「これは革命的な蜂起の最初の勝利である」とたたえ、「直ちに広東の自分たちの兄弟の例にならうよう」⁽²⁹⁾に全国の労働者、農

民、兵士に訴えた。しかし蜂起失敗の事実が誰の目にも明白になるに及んで、一二月一七日、中共中央は再び全国の人民に対して次のように呼びかけた。すなわち、中共中央はここでは、「ブルジョアジーの勝利は一時的なものであり、われわれはこの勝利を最後のものにするにある」、このため、「地下活動の組織化、農民によるパルチザン戦争の遂行、反動的支配の打倒、最終的な勝利の達成に自己の注意の全てを向けることが必要である」とし、「全ての労働者にストライキとデモを組織するよう……農民に劣紳に対してパルチザン闘争を続けるよう……労働者、農民、全ての勤労者に直ちに自己の隊伍の強化にとりかかり、新たな闘争の準備をするよう」に訴えた。その後、中共中央は一二月二四日、国民党政府がソビエトとの外交関係を断絶したのに抗議する声明を出したが、そこでは、「今や中国全体で革命運動は高揚している。広州での事件は、近い将来において全国を巻き込むであろう全面的な暴動の前触れとなるであろう」と述べられていた。この声明での指摘から明らかなように、中共中央は広州暴動失敗後も依然として、革命情勢が低下したのを認めなかった。

中共中央のこうした立場は、一九二八年二月に開かれたコミンテルン執行委員会第九回全体会議で批判された。ここでコミンテルンは、「現在の段階を……すでに社会主義革命に成長転化した革命として特徴づけることは間違っている。同様に革命を「間断なき」革命として特徴づけること（コミンテルン執行委員会代表の立場）も間違っている」。「労働者、農民の革命運動の最初の波は過ぎ去った」。「現在では全国的な規模で革命的大衆運動の新たな力強い高揚はもはや存在しない」とし、革命を破滅させる可能性のある一揆主義や暴動をもてあそぶことに対して断乎たる闘争を求めた。また広州蜂起に対しては、「中国でソビエト政権を組織するプロレタリアートの英雄的な試みであり、労農革命を発展させる上で大きな役割を果たしたが、指導上で多くの誤りをさらけだした。すなわち、敵の軍隊

内でと同様に、労働者および農民の間での準備活動の不十分、「黄色」組合員の労働者に対する誤った態度、党組織および共産青年同盟自身の蜂起に対する準備の不十分、中国全体の中心地に広東の事件についての情報が十分に知らされなかったこと、大衆の政治的動員の弱さ（広範な政治ストの欠如、蜂起の機関として広東における選挙にもとづくソビエトの欠如）であり、その責任の一端はコミンテルンに対して政治的に責任を負っている直接の指導者（同志Nその他）にある⁽⁸³⁾とし、中共の暴動指導上の誤りを批判するとともに、コミンテルン自身もコミンテルン代表の指導責任という形で一部その誤りを認めた。しかしコミンテルンはそれと同時に、「これらの指導上の誤りにもかかわらず、広東蜂起は、偉大な中国革命の指導者という歴史的な役割を担うことを正当にも求めている中国の労働者の、最も偉大な英雄主義の模範とみなされなければならない」とし、一方でこれを高く評価した。しかし、このコミンテルンによる批判にもかかわらず、中共中央の極左的な立場はすぐには止まず、それにもとづく活動は同年四月まで続いた。

かくて、コミンテルン二月決議による批判と評価は同年七月に開かれた中共第六回大会——その中国での準備活動には、当時のコミンテルン代表ミトケヴィッチも参加した⁽⁸⁴⁾——にひきつがれ、同大会で瞿秋白を総書記とする旧指導部に代わって新指導部が選出され、ここにこれまでの過激な方針は一応是正された。

② Обращение Коммунистической партии Китая к народу по поводу восстания рабочих, крестьян и солдат Гуандуна, там же, стр. 191.

③ Вторичное обращение Коммунистической партии Китая к народу по поводу восстания в Гуачжоу, там же, стр. 199-200. なおこの再度の呼びかけではまた、「われわれは決定的な闘争のために力を準備することには賛成するが、即時的、全面的な暴動には反対する。なぜならば、即時的、全面的な暴動は反動勢力に都合がよいからである。もしも上海および全

中国の労働者が手に武器を持つて市街戦を起せば、反動派は新たな大殺戮を組織し、長期間にわたって革命の事業を長引かせることができるだろう」、「われわれは冒險主義を許してはならない」とも述べられており、当時の中共中央の極左的立場との関連において興味がある（*там же*, стр. 199-200）。

- (31) Протест ЦК КПК против разрыва гоминьдановским правительством дипломатических отношений с Советской Россией, *там же*, стр. 210.
- (32) Григорьев, *там же*, стр. 316. 波多野、前掲書二二八—二二九頁。
- (33) Резолюция по китайскому вопросу IX Пленума ИККИ, 〈Кантонская коммуна〉, стр. 212. 波多野、前掲書二二—二三頁。ここで同志Nとはハインツ・ノイマンを指すとされている。
- (34) *Там же*, стр. 212. 波多野、前掲書二三四頁。
- (35) Григорьев, *там же*, стр. 317.

おわりに

以上に述べたように、広州暴動は当時の中共中央の左翼冒險主義的な指導方針と情勢判断にもとづいて、革命失敗後の不利な情勢のもとで十分な準備なしに、しかも広範な農民と結びつかずに孤立して行なわれた武装蜂起であったといえる。そして、蜂起した農民と連合して広東の革命根拠地化をはかるというその当初の意図も実現しなかった。しかし、広東コンミューンによって中国革命におけるソビエト革命の段階が本格的に開始されたという点で、その有する歴史的な意義を否定することはできない。